

ワルシャワ大学の日本語教育史

ワルシャワ大学 東洋学部日本語学科 特任講師
岡崎 恒夫

来年（2016 年 11 月）ワルシャワ大学は創立 200 周年を迎える。そして 2019 年にはワルシャワ大学で日本語教育が始まって 100 周年を迎え、ワルシャワ大学日本学科のわれわれにとってここ数年は記念すべき時期に当たる。

そこで、表題の通り、ワルシャワ大学における「日本語教育史」をはじめるとに当たり、先ず日本語講座開講当時の事情を紹介し、100 年後の現代に至る日本語教育の変遷とその周辺について簡略に述べてみたい。

それはドイツのライプツィヒ大学を卒業したボグダン・リヒテル（1891－1980）がワルシャワ大学極東文化学科に日本語講座を開設したことに始まる。それからは彼の弟子筋に当たる後継者が次々にその講座を続けた。途中第 2 次世界大戦で大学活動そのものが停止に追い込まれ日本語講座も消えない程度の存続はあったものの、ほとんど休止状態だった。戦後大学活動が復活すると同時に日本語講座も開始され、1955 年には中国学科に日本学科が正式に併設された。それ以後 1970 年代にその中国学科からも離れ、独自のカリキュラムで日本語教育が始まった。

地理的にも歴史的にも遠く離れているポーランドで、なぜこのように日本語が学ばれ、日本文化が研究されているのだろうか。（第 2 次世界大戦前後の日本で、だれがこれほどポーランド語を学び、文化を研究したのだろうか？）この質問の回答としていくつかの理由が挙げられる。その一つは日露戦争である。次にユダヤ系ポーランド人を 7 千人以上も助けた杉原千畝の存在である。

私が 1970 年代にワルシャワ大学日本学科に奉職した当時の日本語教育事情を話すことで、共産主義政権下にあった中央ヨーロッパの小国でどのように日本語学習が行われてきたか、その一端を紹介する。教科書は無く、辞書も満足にない状態で、学生たちは先生の板書を教材として学び、カーボン紙を使った、かすれた文字の試験を書き、テープレコーダーはもちろん無いので、発音も先生の生の発音を聞くしかない条件下での学習だった。コピーなど無いので、古い新聞記事を皆で回し読みして（あるいは書き写して）訳していくという今からは想像もできない環境の悪さだったのだが、今から考えると、この悪条件が必ずしも負の方向に働いたとは思えない。なぜなら現在ワルシャワ大学日本学科の中核として教えている教官は皆そのころの学生だったからである。